8 腹　痛

腹痛は突然起こってきます。

腹痛といっても、本人が訴えて初めて確認できることですから、痛みを正確に訴えることのできない乳幼児では「不機嫌」などの症状として確認することになります。一般的に、腹痛を訴えることができるのは２歳半～３歳以降、さらに痛みの性質や痛い場所などを正確に訴えることができるのは６歳以降と言われています。１歳未満の赤ちゃんでは、火がついたように激しく泣いたり、泣き止まずに表情も険しく、手足を曲げた状態を続けたりする時は、腹痛が強いことが推察されますし、１歳以上の幼児期でも、表情や顔色、態度、歩き方などで腹痛の程度が推察できます。

腹痛はさまざまな病気が原因でみられます。腹痛に伴って、吐き気やおう吐などがあるか？ぐったりしていないか？熱はないか？下痢はないか？反対に便秘は？など、腹痛以外の症状にも注目してみましょう。便が最後に出たのはいつか？なども大事な情報となります。また、便を直接写真に撮っていただき（おむつや便器内のもので大丈夫です。スマートフォンなどで可）、診察の時に見せていただくのも大変有用な情報となるでしょう。

一般的に子どもの腹痛の原因として最も頻度が多いものは便秘症や感染性胃腸炎と言われています。多くは緊急での対応の必要のないものですが、中には緊急で何らかの処置や対応が必要な病気が隠れていることもあり、その中で重要なものに「腸重積症（ちょうじゅうせきしょう）」という病気があります。離乳期初期から幼児期までにみられることが多く、腸の一部分がその先の腸にはまり込み、腸と腸が重積することでうっ血を起こす病気です。典型的には10 ～ 20分おきに激しく泣いたり、吐いたり、便に血が混じったり、などの症状がみられますが、吐いたり便に血が混じったりするのは必ず起こるとは限りません。長時間そのままにしておくと腸が弱って破れるため、緊急で特殊な処置が必要となることがあります。泣いて、泣き止んで、また泣いて、をしつこく繰り返す時は早めに医療機関を受診しましょう。

また比較的頻度が多く、広く知られているものとしては、「虫垂炎（ちゅうすいえん）（俗にいう盲腸）」があります。お腹の右下を痛がることは有名ですが、発症間もないころは風邪や胃腸炎などと同じような症状で右下腹部の痛みは目立たないので、疑うこと自体が難しい場合が多いとされています。病院での診断も決して容易ではありません。時間が経ってゆっくりと完成されていく病気なので、持続して右下腹部を痛がるようになるなどの症状の変化に注意し、気になるようであれば医療機関

を受診しましょう。

　その他、頻度は低いですが腹痛を引き起こす重篤な病気が隠れている場合もありますので、心配な場合は医療機関を受診し、医師の指示を仰いでください。

一口メモ

新生児マススクリーニング

生まれつきの病気（内分泌、代謝、免疫の病気）がないか、を調べる検査です。生後４、５日目の赤ちゃんの足の裏から数滴の血液を専用の濾紙（ろし）にしみ込ませて行います。熊本では、全国に先駆けて数多くの先天性の病気の検査（スクリーニング）が熊本大学などの協力で可能となっています。検査には費用がかかりますが、熊本県、熊本市をはじめとして各自治体などが費用の一部を補助しています。先天性の病気は、早く発見し、早く治療を開始することが大事です。ぜひ、検査を受けるようにしましょう。